

J-STAGE NEWS

J-STAGE

J-STAGEニュース

No. 37

ISSN 1346-1990

2014年9月12日発行

独立行政法人
科学技術振興機構

電子ジャーナルの最新情報をおとどけるJ-STAGE機関紙

今号のおもな記事:

- J-STAGE は、日本発オープンサイエンスのプラットフォームへ!
- Google Scholar × J-STAGE セミナー「Google Scholar と日本からの電子ジャーナル出版」
- 投稿審査システム利用規約が改正されました - 充実したサービスの持続に向けて -
- 日本発ジャーナルのインパクト向上をめざして
- 2013年版インパクトファクター公表/J-STAGE・トムソン・ロイター ジョイントセミナー報告 -
- J-STAGE の新枠組「J-STAGE Lite (仮称)」報告説明会を開催します

ほか



J-STAGEは、日本発オープンサイエンスのプラットフォームへ!

昨今、論文情報をはじめとする学術情報のオープンアクセス(OA)化が大きな潮流となりつつあります。

日本最大級の公的電子ジャーナルプラットフォームである J-STAGE にも、オープンアクセスのインフラとしての役割が強く期待されるようになってきました。このような情勢のもと、J-STAGE は今後、掲載論文情報のよりオープンな流通をめざし、コンテンツ発行・運用機関である学協会様のご協力をいただきながら、オープンアクセスを促進するサービス枠組みや新機能を着実に実装してまいります。

なお、本件についての J-STAGE 利用学協会様向け説明会を、6月12日に東京、7月2日に京都で実施いたしました。ご多忙の折にもかかわらず多くの皆様にご出席いただき誠にありがとうございました。説明会においては、オープンアクセスへの対応方針のほか、Google Scholar 等内外の学術情報検索サービスとの連携を強化するため、抄録のない記事につき本文 PDF の 1 ページめをプレビュー表示する機能(7月より順次リリース)、現状、必要に応じオプトアウトの申告をお願いしている新規検索連携先への個別対応一本化(J-STAGE として一括連携し、検索サービス品質の平準化と、学協会(発行機関)様・JST における対応工数節減をめざします。Google、CiNii について7月より順次実施、それ以外の連携先についても実施準備中)、検索クローラへのアクセス開放などを行ってまいります。

概要等については、各学協会様に文書の郵送にてご案内を差し上げたほか、以下からもご確認いただけます。

J-STAGE では、世界中の研究者・読者の皆様から、より一層「見つかる」「読める」コンテンツの運用に注力してまいります。引き続きご支援・ご協力のほどどうぞよろしくお願いいたします。

J-STAGE ご利用学協会説明関連資料

https://www.jstage.jst.go.jp/pub/html/AY04S260_ja.html#130726



上: J-STAGE 利用学協会説明会の様子(6月12日)

右: 「JST のオープンアクセスへの対応」

(<https://www.jstage.jst.go.jp/pub/html/pdf/AY04S560.files/140730setsume.pdf>)

JSTのオープンアクセスへの対応

JSTは、イノベーションを駆動する科学技術・学術情報のオープンな流通を強く推奨

- ◆ オープンアクセスに関するJSTの方針(平成25年4月)
「JSTの研究費で推進される研究課題において得られた学術論文等の研究成果について、OA化を推進する。」
http://www.jst.go.jp/pr/intro/pdf/policy_openaccess.pdf
- ◆ JSTのファンディングによる研究成果は、OAの義務化を実現する(2014年3月13日 JST理事長)
- ◆ 「文科省ではOA環境の充実の観点から科学研究費の補助金やJSTの学協会の取り組みの支援を行うこと、NIIの各大学における取組に対する支援などの促進策に取り組んでいきたい。文科省は研究者の層の理解を得るところを含めて、一層のOAの促進に今後とも積極的に取り組んでいきたい。」(2014年5月13日参議院 文部科学大臣答弁要約: <http://www.webtv.sangin.go.jp/webtv/index.php>)

これらを踏まえ、J-STAGEはオープンアクセスのプラットフォームへ!!



Google Scholar x J-STAGE セミナー「Google Scholar と日本からの電子ジャーナル出版」

J-STAGE15周年記念スペシャルセミナーシリーズ第1回を開催しました

J-STAGE は 2014 年、おかげさまで 1999 年のサービス開始から 15 周年を迎えます。

これを記念し、4月8日、Google より Google Scholar 創設者のお一人である Anurag Acharya 氏を講師に迎えての特別セミナーを JST 東京本部にて開催しました。「もっとどのような人でも簡単にアクセスできるように」「今後は“人”を鍵にした学術情報の検索を重視」など、Google Scholar のサービス方針や日本の電子ジャーナルコンテンツへの期待を軸に、さまざまなトピックを紹介いただきました。講演に引き続いての Q&A セッションでは、会場から多くの質問が寄せられ、詳しい回答をいただきました。おもなものをご紹介します。



- Q. 「人」の情報としてオーサー・プロフィールというサービス機能を扱うとのことだが、類似の先行的事例として ORCID などがある。これらサービスとの連携などは考えられているか。
- A. ORCID とは連携を開始しているが、一方でオーサー・プロフィールにおいて、Google Scholar 側の論文情報等について、著者が自らの書いた論文かどうかなどをチェックできるようにしたい。
- Q. 研究のインパクト(影響度)の測り方については被引用を重視している印象であるが、その他の指標も考えられないか。
- A. 被引用のほかにデンシティ(ある分野においてどの程度集中的に論文などが書かれ、取りあげられているか)や、SNS での扱いなどが指標になりうるかもしれないが、今のところ被引用のほか有用な要素が見当たらない。
- Q. そもそも、スカラリー・リテラチャーの定義はどの範囲までを想定されているか。
- A. 定義は難しいが、発表されているロケーションなどよりも、学術分野からの被リンクなどを重視している。そのため、定義は次第に広くなりつつある。従って、必ずしもオンラインジャーナルコンテンツ等でなくとも、そうしたリンクやメタデータなどによってスカラリー・リテラチャーと判断されうることになるだろう。

※内容は一部要約・編集しています

JST では、関係機関のご協力を得て、電子ジャーナルや学術情報流通についてのさまざまなセミナーを開催し、多くの皆様から好評をいただいております。今後も順次開催を予定しており、J-STAGE News(電子メール版)やツイッターなどでもご案内しておりますので、ご関心をお持ちの皆様はどうぞお気軽にご参加ください。(セミナーによっては、J-STAGE ご利用学協会を優先させていただく場合もございます。)



投稿審査システム利用規約が改正されました -充実したサービスの持続に向けて-

(投稿審査利用学協会様)利用負担額算出のための組織規模調査にご協力をお願いいたします

関係の学協会様には説明会等でご案内を差し上げてまいりましたが、J-STAGE オプションサービスである投稿審査システム(EM タイプ、SM タイプ)をご利用の学協会様に対して一部自己負担の枠組みを導入すること等に伴う、J-STAGE 投稿審査システム利用規約の改正を実施いたしました。

このための学協会規模調査のご案内メールを、ご利用学協会の皆様に送付しております。本件調査は、利用規約に基づく利用料一部ご負担額の算出根拠となるものですので、該当する学協会様は何卒ご回答をお願いいたします(回答期限:9月25日)。万一、期限までに本件調査等に関するJSTからの連絡が取れない場合には、平成27年度以降におけるJ-STAGE 投稿審査システム継続利用の一部または全部の利用が制限される場合もございますので、万一J-STAGE の投稿審査システムをご利用中にもかかわらず本件に関するJSTからのご連絡が届いていない学協会様がいらっしゃいましたら、JST までお知らせください。

J-STAGE 投稿審査システム利用規約等は、以下のページからご確認いただけます。

投稿審査システムユーザページ:

https://www.jstage.jst.go.jp/pub/html/AY04S300_ja.html



日本発ジャーナルのインパクト向上をめざして

2013年版インパクトファクター公表 / J-STAGE・トムソン・ロイター ジョイントセミナー報告

7月30日(日本時間)、トムソン・ロイター社より、2013年のインパクトファクター(IF)が公表されました。IFは、同社のWeb of Science®データベースに収録されている学術誌について、その学術誌に掲載された論文が一定期間内において平均してどの程度引用されたかを示す値です。分野や雑誌の内容・形態等によって数値の傾向は大きく異なり、単純に比較などを行うことはできません。また、あくまでも雑誌タイトルについての数値であり、掲載される論文についての指標ではありませんが、その学術誌の影響度を示すめやすの一つとして広く知られています。

日本から刊行されている学術誌のうち、インパクトファクターを取得している雑誌は240誌あまりありますが、そのうちおよそ100誌がJ-STAGEから発行されています。今年新たにインパクトファクター付与対象となった日本の雑誌は1誌、Journal of Nippon Medical School誌(日本医科大学医学会)で、同誌はJ-STAGE利用誌です。なお、J-STAGE掲載誌の中で最もIFが高かったタイトルはCirculation Journal誌(日本循環器学会)(3.685、前年比+0.107)でした。

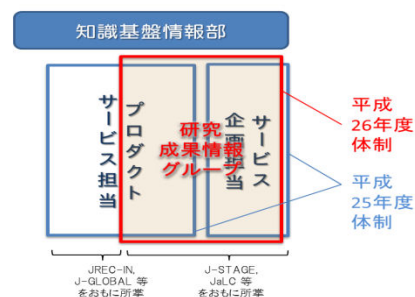
なおJSTでは、6月20日、「Web of Scienceと国際発信力強化へのソリューション ～ジャーナルの『自画像』を分析し、戦略を立てる～」と題したセミナーを同社のご協力のもと共同で開催しました。当日はJ-STAGE利用学協会様を中心に100名を超える参加があり、同社学術ソリューション出版・学会事業担当マネジャー 波多野薫様、公益社団法人化学工学会 山下和子様から、「どのような対象にジャーナルをPRすると効果が高いか」「質の高い投稿を増やすために、どんなことから始めればよいか」など、ジャーナルの発信力向上のために考慮すべき具体的なヒントについてお話をいただきました。



JST 知識基盤情報部の平成 26 年度改組について

JST 知識基盤情報部は、提供サービスの充実等を目的として、平成 26 年度の組織改正を実施いたしました。J-STAGE に関しては、これまで企画部門(サービス企画担当)と運用部門(プロダクトサービス担当)に分かれていた担当セクションが「研究成果情報グループ」として統合されました。研究成果情報グループは、J-STAGE のほか、J-STAGE と密接な関係のある「ジャパンリンクセンター(JaLC)」の運用等も所掌し、よりきめ細かなサービス運営をめざします。

J-STAGE 関連の連絡先等はこれまでと変更ありません。今後ともどうぞよろしくお願ひ申し上げます。



JST 知識基盤情報部(J-STAGE 関連)改組概念図



役立つ! FAQ を充実させています!

J-STAGE では、利用学協会様向けの FAQ(よくある質問)を公開しています。「公開記事を修正することはできるの?」「1 ページのみの記事は、メタデータにおけるページの記述を、開始ページと終了ページに同じ番号を記述すべき?」「カバー画像を変更したが、正しく表示されない…」など、J-STAGE をご利用になるうえで遭遇するさまざまな疑問にお応えしていますので、J-STAGE ご利用中の学協会様はもちろん、導入を検討中の学協会様もぜひご参考としていただければ幸いです。

J-STAGE トップページ「利用学協会の方」メニューの「FAQ」リンクからご覧いただけます(右図)。内容は今後も充実させてまいります。



第16回図書館総合展（横浜）に出展します！

11月5日(水)～7日(金)にパシフィコ横浜(横浜市)にて第16回図書館総合展が開催されます。大学・研究機関等の図書館・学術情報流通関係者が会する催しでブースを出展し、広くJ-STAGEのPRを行う予定です。また、J-STAGEが連携するJaLC(ジャパンリンクセンター)では、同会場で6日(火)午前10時から「識別子ワークショップ～JaLC、CrossRef、DOI、ORCID、そして…」と題し、武田英明(国立情報学研究所)、Ed Pentz(CrossRef Executive Director)、Salvatore Mele(CERN)各氏によるワークショップ・セッションを実施いたします。

みなさまのご来場をお待ちしております。(日程・内容等は変更になる場合もございますので、最新情報を図書館総合展のWebサイト等でご確認ください。)

J-STAGE 利用ジャーナル限定特別企画：貴誌を図書館総合展でアピールしませんか？

今年の図書館総合展 JST ブースでは、J-STAGE ご利用ジャーナルのPRスペース「Japan's Leading e-journals on J-STAGE (仮称)」を設置します。スペース利用料は無料(JST負担。配布・掲出物についてご用意願います)です。この機会をお見逃しなく！

【概要】

【1】 紹介パンフレットの配布 [1学会につき2種類まで、各500部程度まで]

JSTスタッフが、来場者にJ-STAGE等の紹介をしながら来場者に直接配布します。

【2】 ポスター(A2サイズまで)の掲出 [1学会につき1枚まで]

ブース内に貴誌ポスターを掲出します。※その他の配布物等もご相談に応じます(出展仕様上ご希望に添えない場合もあります)ご希望のジャーナルはJST(event@jstage.jst.go.jp)まで「図書館総合展示希望」の件名で10月1日までにご連絡ください。詳しいご案内を差し上げます(希望多数の場合は抽選となります。概要は現時点での予定であり変更される場合があります。)

J-STAGEの新枠組み：「J-STAGE Lite(仮称)」報告説明会を開催します

J-STAGE ではこのほど、J-STAGE の機能を縮約してより簡便に記事を登載できる新たな機能・サービスとして「J-STAGE Lite」(仮称)の開発に着手することといたしました。本機能の実装により、研究報告書や紀要など、これまでJ-STAGE をご利用いただけなかった科学技術(学術)刊行物等にもJ-STAGE で内外へ向け研究成果を発信する可能性の開かれることが期待されます。

来る10月6日(月)に東京、10月17日(金)に京都にて、J-STAGE Lite サービス開発方針に関する説明会および科学技術情報流通技術基準(SIST)説明会を開催いたします。新サービスの仕様・内容について、これまで調整している計画・概要のほか、SIST(シスト;電子流通を視野に入れた、論文の書誌情報の記述方法等について定めたガイドライン。http://sti.jst.go.jp/sist/)についての入門的な説明会も併催されます(※)ので、特に新機能・サービスを利用して新規に刊行物の登載利用をお考えの学協会様や学術刊行物発行機関様にはご参考になるかと存じます。この機会にご参加をご検討いただければ幸いです。(※SIST説明については京都会場では資料提示のみとなります)

申し込み方法はこちらのページから：https://www.jstage.jst.go.jp/pub/html/AY04S260_ja.html

J-STAGE Lite (仮称)の開発について：https://www.jstage.jst.go.jp/pub/html/AY04S560_ja.html

SISTについてはこちら：<http://sti.jst.go.jp/sist/index.html> (2012年3月終了事業)

編集後記

J-STAGE スタッフからひとこと

- ♪ 今年からJ-STAGE ユーザー様対応を担当しています。日々多くのご連絡やお問い合わせをいただきますが、丁寧なご案内に心がけています(もしもし)
- ♪ 4月よりJ-STAGEのシステム開発を担当しています杉本です。より良いシステムを作れるよう頑張ります!(杉)
- ♪ J-STAGEのシステム運用を担当させていただきまして、そろそろ2年目に入ります。J-STAGEシステムも今後どんどん進化していきますので乞うご期待!!(佐)

J-STAGE ニュース No. 37 2014年9月12日

編集：独立行政法人 科学技術振興機構 (JST)

知識基盤情報部 研究成果情報グループ

発行人 知識基盤情報部長 水野 充

〒102-0081 東京都千代田区四番町 5-3 サイエンスプラザ

電話 03-5214-8837(ダイヤルイン)

E-MAIL contact@jstage.jst.go.jp

J-STAGE www.jstage.jst.go.jp

Follow J-STAGE
on Twitter @jstage_ej



J-STAGE および J-STAGE ニュースに関するご意見・ご質問をお待ちしております。
JST 知識基盤情報部 研究成果情報グループ (contact@jstage.jst.go.jp)